篳篥

(bi li)

Z.H さん

初中一年级的时候，我在姥爷的葬礼上第一次听到了雅乐。

葬礼在羯鼓，太鼓，钲鼓，笙，龙笛，篳篥所奏的庄严曲调中举行了。穿着便服的乐师们的演奏使我陶醉其中。

在那之后的关于日本古代音乐的音乐课中，我知道了有 1300 年以上历史的世界最古老的管弦乐团—雅乐。直到那个时候我才知道，原来那并不是葬礼的音乐。

大家都听说过东仪秀树这个人吧？

我认为无论是谁都至少听过一次他弹奏的篳篥。东仪家族在自奈良时代以来的 1300 多年间，将雅乐世代相传下来。

同样姓东仪的还有几个，雅乐演奏家东仪秀树是江户幕府的乐師的后裔。在京都的东仪家有名的雅乐家是东仪铁笛，谁都听过他作曲的校歌。

他是早稻田大学校歌（作词相马御风）的作曲者，“在都城西北早稻田的森林里…”歌曲的第一部分就很著名。二人的家族之间完全没有血缘关系。

他演奏的篳篥的起源地被公认为是亀兹国（现在的中国新疆维吾尔自治区阿克苏地区库车县附近，塔里木盆地的北侧：这个国家位于天山南路位置，也被称为丘兹或屈兹，在玄奘的《大唐西域记》中被记载为屈支国。《西游记》记载，在这里，叫做沙悟净的妖怪出现了，他被孙悟空制服后跟随三藏法师了。）

在公元前一个世纪左右流传至中国，日本在 6 世纪前后，从中国的乐师那里流传过来。丝绸之路沿途有各种各样的葦笛，土耳其的 Mey 和 Zurna 也是葦笛的一员。

篳篥也是葦笛的一员，是和木管乐器的双簧管和巴松管相同的双簧乐器。在中国最有名的双簧乐器是唢呐，原型也是篳篥。所以中国的篳篥的前身是像唢呐的号角嘴一样的东西。无论是哪种双簧的材料都用芦苇，把其安装在乐器的吹口上，用吹的方式使之震动而发出声音。

篳篥的簧叫做芦舌。一般来说 称为“舌”。把干燥的芦苇茎加热制作而成。

震动的部分被削薄，装入被叫做“世目”的藤制成的圆环，另一面用被称为“图紙”的纸卷起

来。演奏的时候，簧的前端空出 1mm 左右的间隙。篳篥的“舌”的材料的芦苇在雅乐的世界里叫“yoshi”。

虽然芦苇在大部分的河流中生长着，但是雅楽界中，琵琶湖的近江八幡地区以及从琵琶湖流出的在淀川生长的“yoshi”作为篳篥的舌的材料而被视若珍宝。

在那之中大阪府高槻市流动的淀川的鹈殿的芦苇被认为是最好的东西。不同之处在于好的芦苇的厚度，壁厚，硬度（纤维致密度）是最佳的，并且当制成簧时声音的稳定性和耐久性特别优异。雅乐团体中篳篥使用的簧，据说几乎都是琵琶湖·淀川水系产。1

特别是鹈殿上生长的苇子，高 3 米的大形状芦苇，厚实又富有弹性，据说宫内厅乐部全部使用的鹈殿的苇子。每年 2 月，在鹈殿当地人们的合作下，举行“鹈殿的苇原烧”。以防止杂草等，培育高品质的芦苇。

新名神高速公路的 “京都府八幡市～大阪府高槻市” 路线预计会经过鹈殿。因为计划将高速公路建设在淀川的取水口附近，而这里能得到最高品质的芦苇，所以担心芦苇质量和其生存方面可能会出现问题。

在环境恶化的影响下，如果质量好的芦苇很难确保的话，雅乐的主要乐器篳篥的存亡会是怎么样的呢？

一旦失去是无法复原的！

关于鹈殿的苇原的保护问题，对国家来说，高槻市作为行政主管更应该发出呼吁。

我们应该更正确地了解日本文化遗产的价值。

（完）

2018 年 4 月

（以下日本語訳）

篳篥（ひちりき）。

私が初めて雅楽の演奏を聴いたのは、中学一年生の時、私の母方のお爺さんの葬儀でした。
笙、龍笛、篳篥、太鼓、鉦鼓、鞨鼓の厳かな調べの中で神式の葬儀が行われました。
　狩衣を着た楽士達の演奏に我を忘れて聞き惚れていました。
　その後、それらは音楽の授業の中で日本古来の音楽で、世界最古のオーケストラとして１３００年以上の歴史がある雅楽と言うものだと知りました。
　それまでは、葬式の音楽と思っていたのですが、実はそうではなかったのです。

　皆さんは、東儀秀樹という人の名前を聞いたことがあるでしょうか？
少なくとも，一度は、彼の奏でる篳篥の音を聞いたことがあるかと思います。
東儀家は、奈良時代から 1300 年以上の間、雅楽を世襲してきた樂家の家系です。
同じ東儀の姓でもいくつかあり、東儀秀樹は江戸幕府に仕えた楽師の末裔にあたる雅楽演奏家です。
　京都の東儀家で有名な雅楽家は、東儀鉄笛でこの人の作曲した校歌は、
誰でも一度は耳にした事があります。
「都の西北 早稲田の森に…」の歌い出しで有名な早稲田大学校歌（作詞 相馬御風）の作曲者です。
　両者の家系に繋がりは、全くありません。

　彼の演奏する篳篥は、亀茲国（現在の中国新疆ウイグル自治区アクス地区庫車県付近、タリム盆地の北側：天山南路に位置した国で、丘茲、屈茲とも書かれ、玄奘の『大唐西域記』では屈支国と記されています。「西遊記」では、ここで沙悟浄という妖怪が現れて孫悟空に退治され、三蔵法師に付き従うことになった）が起源の地とされており、紀元前 1 世紀頃に中国へ流入し、日本には 6 世紀前後に、中国の楽師によって伝来されました。
シルクロード沿道には様々な葦笛があり、トルコ地方の Mey(メイ)や Zurna(ズルナ)も葦笛の仲間です。
　篳篥は、同じく葦笛の仲間で、木管楽器のオーボエとかファゴットと同じ二枚リードの楽器です。
　中国で二枚リードの楽器で一番有名なものは、チャルメラで、やはり篳篥が原型です。
そのせいか中国の篳篥の先端はチャルメラのようにラッパ口に様に広がっています。
いずれも二枚リードの材料は、葦でこれを楽器の吹口に取り付けて吹くことで振動させて

音を出します。
　篳篥のリードのことを蘆舌といいます。普通は単に「舌（した)」と呼んでいます。
乾燥した葦（あし）の茎を熱を加えてへしゃげて作られます。
振動する部分は薄く削られ、世目と呼ばれる籐（とう）で出来た輪をはめ込み、
もう片方には図紙（ずがみ）と呼ばれる和紙が巻かれています。
演奏するときリードの先端は 1㎜ 程の隙間が出来ています。

　篳篥の「舌」の材料となる葦（あし）を雅楽の世界では「よし」とよんでいます。
葦は大抵の大きな河川に生えていますが、雅楽界では琵琶湖の近江八幡地方や琵琶湖から流れ出る
　淀川に生える「よし」が篳篥の舌の材料として重宝されています。
なかでも大阪府高槻市を流れる淀川の鵜殿の葦が最良の物とされています。

　何が違うのかといいますと、太さ、肉厚、硬さ（繊維の緻密さ）が最適で、リードにした時の音の安定感、耐久性が特に優れているということです。
雅楽団体で吹かれているリードのほとんどは琵琶湖・淀川水系産と言われているとのことです。
　特に鵜殿に生えるヨシは、高さ 3m もある大形のヨシで太く弾力性に富んでおり、
宮内庁楽部ではすべて鵜殿のヨシが使われていると言われます。
鵜殿では、雑草などを防いで品質のよいヨシを育てるため、毎年 2 月に地元の人々の協力のもと「鵜殿のヨシ原焼き」が行なわれています。

　新名神高速道路の京都府八幡市～大阪府高槻市のルートがこの鵜殿を通る予定です。
最も良質なヨシが取れる淀川からの取水口の近辺に高速道路の建設が予定されていることで、ヨシの品質保持、あるいは存続そのものに問題が生じることが懸念されています。
環境の悪化の影響で材料に使える良質な葦の確保が難しくなれば、雅楽の主要な楽器、
篳篥の存亡はどうなるのでしょうか？
一度失ったものを元に戻すのは、ほぼ不可能です。
鵜殿の葦原の保存について、国に対して、高槻市は行政主管としてもっと声を発するべきです。
　我々は、日本の文化遺産の価値をもっと正しく知るべきなのです。

（終わり）